午後の行商人

船戸与一

Funado Yoichi

講談社

午後の行商人

船戸与一

Funado Yoichi

江苏工业学院图书馆
藏书章

講談社

N. D. C.913 536p 20cm

午後の行商人

一九九七年十月十五日　第一刷発行

著　者　船戸与一

発行者　野間佐和子

発行所　株式会社　講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号一一二―〇一
電　話　（〇三）五三九五―三五〇五（編集部）
（〇三）五三九五―三六二二（販売部）
（〇三）五三九五―三六一五（製作部）

印刷所　凸版印刷株式会社

製本所　株式会社　若林製本工場

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

©Yoichi Funado 1997, Printed in Japan

ISBN4-06-208850-9　（文２）

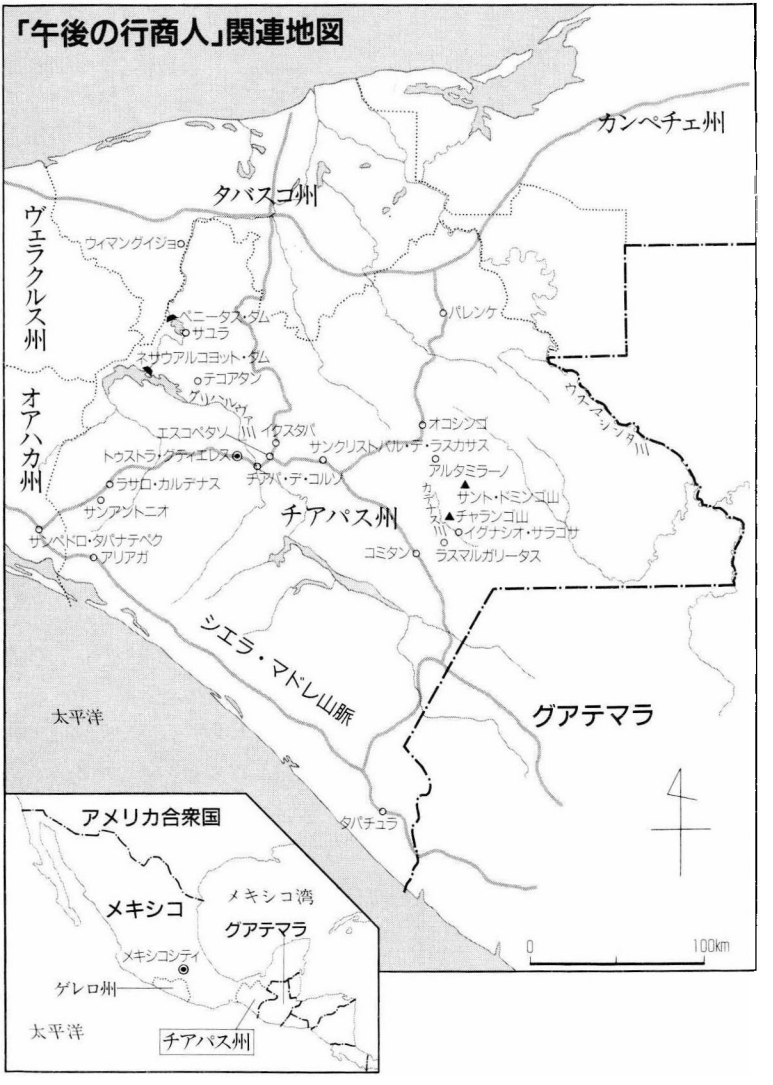
目次

第一回公判　9
陳述――午後の行商人　16
論告・弁論　525

装丁　多田和博
写真　八木　博
イラストレーション　金本　進

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

午後の行商人


「午後の行商人」関連地図
カンペチェ州
タバスコ州
ヴェラクルス州
オアハカ州
チアパス州
グアテマラ
シエラ・マドレ山脈
太平洋
ウィマンゲイジョ
ペニータス・ダム
サユラ
ネサウアルコヨット・ダム
テコアタン
グリハルバ川
エスコペタソ
イクスタパ
トゥストラ・グティエレス
チアパ・デ・コルソ
ラサロ・カルデナス
サンアントニオ
サンペドロ・タパナテペク
アリアガ
パレンケ
オコシンゴ
サンクリストバル・デ・ラスカサス
アルタミラーノ
サント・ドミンゴ山
カイナス川
チャランゴ山
イグナシオ・サラゴサ
ラスマルガリータス
コミタン
ウスマシンタ川
タパチュラ
0
100km
アメリカ合衆国
メキシコ
メキシコ湾
グアテマラ
メキシコシティ
ゲレロ州
太平洋
チアパス州

「面倒を背負い込みたくなかったら午後の行商人からは何も買うな」チアパス州を旅行中の筆者にメキシコのある教師が忠告した。「売れ残りを押しつけられるだけならまだいい。ときとしてとんでもないものまで抱え込まされることになる」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第一回公判

街全体がやけに埃っぽく、後部座席からでも微かな塵がフロントガラスに吹きつけて来るのがわかる。だだっ広い道路ではときおり発作でも起こしたように紙屑が舞った。ホテルを出たときから湿り気を含んだ四月の風が吹き荒れていたし、空はどんよりと曇っていたのだ。このぶんだと昼過ぎから雨になるかも知れない。そして、おそらく、これからは雨が降るたびに暑くなる。

頭のなかはまだしゃっきりとはしていなかった。寝不足なのだ。ホテルのバァが閉まっても、部屋に戻ってミニバァからウイスキーやブランデーの小瓶を取りだし、ひとりでちびと夜明け近くまで飲みつづけた。

きのうの午後四時過ぎ、衛星中継によってブラウン管に飛び込んできた映像に何だか妙に打ちのめされたような気分がしていたのだ。ペルー日本大使公邸人質事件。陸海空軍から選り抜かれた精鋭百四十名によって編成される特殊部隊の突入。オレンジ色の閃光とすさまじい爆発音。公邸上空を旋回する武装ヘリコプター。ゲリラ十四名の死亡。わたしは思想と呼べるような思想は何も持っていない。同じ民族の血を汲む人間としてペルー大統領アルベルト・フジモリには漠とした親近感を抱いていたが、べつに強行突破作戦を支持するわけでも反対するわけでもなかった。

ただ赤道の向こうの国でじぶんには縁のないこととしてぼんやりとその映像を眺めていただけなのだ。胸の裡に妙なものが突き刺さったのはアナウンサーが不確定情報としてひとりの少女ゲリラの死の状況を伝えたときからだ。年齢はわずか十六歳だった。将来は美容師になるのが夢だったらしい。公邸占拠十五日間の約束で五千ドルの成功報酬をちらつかされてアンデスの山間の村からリクルートされ占拠部隊のメンバーに加わった。おそらくそういう行為がうまく進もうと頓挫しようとどのような結果を招くか想像もできなかったろう。ひたすら金銭が欲しかったのだ。美容院を開いて貧困の極みにある母親を楽にさせてやれる資金が。公邸占拠が長びくに従って少女は母親恋しさに泣いたという。閃光弾が炸裂した直後、特殊部隊が飛び込んで来た。少女は自動小銃を投げ棄てて両手をあげた。ゲリラのリーダーはこんな事態が生じたときにどうすればいいのか何も教えてくれなかったからだ。全身が竦んだのは驚愕以外の何ものでもなかったろう。両手をあげたのは本能だった。こうすれば射たれはしないだろうと。しかし、特殊部隊は投降を受け入れるつもりは最初からなかった。自動小銃が一斉に火を吹いた。何発の銃弾が放たれたのかは明らかにされていない。蜂の巣状になって崩れ落ちた少女の肉体。美容師になりたかったというささやかな夢の終わり。十六歳の死。不確定情報としてアナウンサーが伝えたのはそんなところだ。それがわたしの胸に突き刺さり、その棘は当分のあいだ取れそうもない。なぜゲリラたちはそんな少女をリクルートしたのか？　どうして特殊部隊は武器を棄てて投降しようとした少女をあれほど酷く殺してしまったのか？　ああ、このラテン・アメリカでは実際のところ何が起こっているのか？　わたしの脳裏にはそのことが焼きついたまま離れそうにない。いまもタクシーの後部座席に沈み込み腕組みをしたままじっとそれを考えている。

隣りに座った岸本奈津子も何も言わない。

わたしはメキシコ・シティのソナ・ロッサで日本料理のレストランを開いている。開店をしたのが二十八歳のときだからもう二十三年が経つ。経営はまあまあ順調だ。マネージメントは女房のメルセデスに委せてあるのでさして忙しくはない。こうやってチアパス州の州都トゥストラ・グティエレスにやって来たのも時間的な余裕があってのことだ。知人を介してわたしは奈津子の通訳を頼まれた。もっと正確に言えば、ある裁判を一緒に傍聴して欲しいとの依頼を受けたのだ。わたしはチアパス州はおろかメキシコ南東部に一度も足を踏み入れたことがなかったので、即座にこれを引き受けた。きのうの朝メキシコ・シティを発ち、こうしていまチアパス州刑事裁判所に向かいつつある。

傍聴を頼まれたのはある日本人による殺人事件で、被告は奈津子とむかし東京で同棲まがいの暮しをしていたのだという。奈津子は新婚だった。夫はある都市銀行に勤め、新婚旅行にメキシコを訪れたのだが、たまたま被告の第一回公判にぶつかった。夫のほうは傍聴につきあうことを拒否した。新妻のむかしの恋人なのだ、顔を合わせるのを避けたかったのだろう。

被告人の名まえが香月哲夫だということはメキシコ・シティで発行されている日系紙で最初から知っていた。わたしは一緒に傍聴することを条件にいくつかの質問を奈津子にぶっつけてみた。

――どんな青年だったんですか、香月哲夫は？

「どんなって、ふつうの男ですよ、哲ちゃんは。いえ、でしたと言うべきですね。あたしたち、大学で同級でクラブ活動も一緒でした。あたしのいまの主人もね。頭はいいのかどうかわからない。スポーツはそこそこだったけど、とくに得意なものなんかなかった……」

――同棲まがいの暮しをしていたんでしょう？　性格的にはどうだったんです？

「やさしかった。けど、いまの若い男性はみなやさしいから、すっごくやさしいかどうかまでは

言い切れない。とにかく、ふつうにやさしかった。そうとしか表現できません」
——なのに、どうして別れていまの御主人と一緒になったんです？
「哲ちゃんがメキシコ留学したからですよ。連絡は電話だけになった。それも週にいっぺんになり、月にいっぺんになった。わかるでしょ、いくら親密な交際をしてたとしても、それじゃだんだん疎遠になっていきます」
——メキシコ・シティで新しい女性ができた気配は？
「それはないと思います。こんな古い言いかたをして笑われるかも知れないけど、女の直感でそれだけはないとわかるんです」
——なら、どうして別れたんです？
「あたしのほうが痺れを切らした。国際電話だけのつきあいなんて、それにあたしの周囲の友だちはどんどん結婚していくし……哲ちゃんの頼りなさも身に染みるような気がしはじめて……」
——どういうことです、それ？
「メキシコ自治大学に留学して、中南米経済を専門にやると言ってたんです。けど、一年ぐらいまえからそういうことにほとんど熱意が感じられなくなっていた。あたしは哲ちゃんの留学はただのモラトリアムで中南米経済の研究なんて口実に過ぎないんじゃないかと思いはじめたんです」
——そういう若者がついに殺人事件を起こした？
「それが信じられないんです。哲ちゃんはやさしかった。特別やさしいこころの持主かどうかはわからないけど、とにかくやさしかった。虫一匹殺すような人間じゃなかった。そんな哲ちゃんがなぜ人なんか殺したのか、あたしはそのことを知りたくて一緒の傍聴をお願いしたんです」

タクシーが煤んだ建造物の前庭に滑り込んだ。ここがチアパス州刑事裁判所なのだ。わたしは勘定を支払って岸本奈津子とともにタクシーを降りた。傍聴手続はメキシコ・シティの法律事務所を通じてすでに済ませてある。わたしたちは金属探知器の調べを受けてから法廷の傍聴席へと進んだ。

傍聴人の数はさして多くない。ぜんぶで二十人ほどだろう。そのなかに顔見知りの日系紙の記者がひとりいる。わたしのレストランによく酒を飲みに来る大新聞やＴＶの支局の連中はだれもいなかった。どういう理由だったにせよ、これは香月哲夫という若い日本人がメキシコ南東部をぶらついているときにたまたま犯したくだらない殺人事件なのだ、さしたるニュース・ヴァリュウはない。それよりも援軍としてリマを取材中なのだろう。

公判開始まで十五、六分はあったと思う。

法廷のなかは涼しさを通り越して寒いぐらいだった。

冷房が利き過ぎているのだ。

岸本奈津子はこの第一回公判が終わると、夜の便でメキシコ・シティに戻ることになっている。たぶん、新婚の夫の嫉妬を警戒しているのだ。スペイン語のできない奈津子のためにトゥストラの空港まで送ってやらなきゃならないが、わたしはそのあと数日チアパス州のいくつかの町をぶらついてみようと思っている。

やがて、廷吏に連れられて被告人と弁護人が現われた。弁護人が国選だということは日系紙の報道によってわかっている。わたしは香月哲夫の表情をじっと眺めた。肉体的には二十五歳の若さそのものだ。太ってもいなければ痩せてもいない。身長もこの年齢なら日本人として平均的なものだろう。だが、表情や立ち振舞いは年齢不詳という気がした。

被告人がこっちを一瞥した。わたしではなく隣りの奈津子を。この明るさなのだ、見まちがうことは絶対にないだろう、かつての同棲相手を。しかし、眼差しに変化はまったく表われなかった。鉢植えのシクラメンでも見てるかのようだった。態度には怯えも諦めも感じさせない。どう言い表わせばいいのだろう、被告人はすべてのことに超然としているかに見えた。

「変わったわ、哲ちゃん、ほんとうに変わった」奈津子がわたしの耳もとで囁いた。「あたしが知ってる哲ちゃんじゃないみたい」

被告人と弁護人が被告席に腰を下ろすと、混血の検事と書記官二名が着席した。判事は七十近い白髪の純血スペイン系だった。メキシコの州レヴェルでの刑事裁判は高等裁判所に持ちあげられないかぎりこういう構成で行われる。公判開始が判事によって宣せられた。検事が起訴状を読みあげた。

それはラスマルガリータスという田舎町の外れで起きた殺人事件だった。昨夜ペルーの日本大使公邸突入時に起きた十六歳の少女の死による衝撃に較べれば、だれがどうやって殺されたにせよ、わたしには取るに足らないことのように思われた。奈津子は被告人が別人みたいだと言う。しかし、かりそめにも人を殺したのだ、変化しないほうがおかしい。すぐに判事による人定尋問がはじまった。

判事「被告は名まえを名乗りなさい」

被告「忘れました」

判事「何だって？」

被告「忘れたと言ってるんです」

判事「国籍は？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c